沈まぬ太陽（二）

アフリカ篇・下

山崎豊子

沈まぬ太陽（二）

アフリカ篇・下

山崎豊子

新潮社

沈まぬ太陽（二）　アフリカ篇・下

発行――一九九九年　六　月二五日
著者――山崎豊子
発行者――佐藤隆信
発行所――株式会社新潮社
162-8711 東京都新宿区矢来町七一
電話――編集部（03）三二六六―五四一一
読者係（03）三二六六―五一一一
振替――〇〇一四〇―五―八〇八
印刷所――錦明印刷株式会社
製本所――加藤製本株式会社
© Toyoko Yamasaki 1999, Printed in Japan
乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。
価格はカバーに表示してあります。
ISBN4-10-322815-6　C0093

沈まぬ太陽 (二) アフリカ篇・下 ＊目次

第七章　テヘラン　9
第八章　ナイロビ　142
第九章　春雷　301

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

◇目次 (一)、(三)〜(五)◇

沈まぬ太陽 (一) アフリカ篇・上
第一章 アフリカ
第二章 友 情
第三章 撃 つ
第四章 クレーター
第五章 影
第六章 カラチ

沈まぬ太陽 (三) 御巣鷹山篇
第一章 レーダー
第二章 暗 雲
第三章 無 情
第四章 真 相
第五章 鎮 魂
第六章 償 い
第七章 紫 煙
第八章 怒 り
第九章 御 霊

沈まぬ太陽(四)　会長室篇・上
第一章　新　生
第二章　朝　雲
第三章　黒い潮
第四章　曙　光
第五章　波　紋
第六章　狼　煙
第七章　弔　鐘
沈まぬ太陽(五)　会長室篇・下
第八章　風
第九章　流　星
第十章　射　る
第十一章　迷　走
第十二章　幾山河
あとがき
参考文献
取材協力者リスト

沈まぬ太陽

沈まぬ太陽 (二)

アフリカ篇・下

カバー写真◇岩合光昭
装幀◇新潮社装幀室

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第七章　テヘラン

テヘランもまた、砂漠の中の街であった。冬のテヘランは厳しく、正面に連なる三、四千メートル級のエルブールズ山脈は真っ白な雪で掩われている。山裾から南へ、街を貫くパーラビ通りの葉の落ちたプラタナスの街路樹の根元にも、雪が残っている。冬は氷点下十度、夏は四十度と、年間の温度差が世界一、著しい都市であった。

恩地は、市南西のメヘラバード国際空港に向って、車を走らせていた。総務担当という仕事柄、空港と市内の事務所を見なければならず、週に数回、空港に出向いていた。

坂の多い街で、北部は標高千五、六百メートル、旧市街のバザールのある南部は千メートルと標高差があり、平坦なカラチで運転免許をとった恩地は、冬の坂道を上り下りするのに慣れておらず、運転に神経を遣った。

半月前、オランダ航空で、カラチからテヘランに到着した時の衝撃を、恩地は昨日のことのように、鮮明に記憶している。メヘラバード国際空港に着いたのは、午後十一時五十分過ぎだった。パキスタン同様、中東諸国の飛行機到着時刻は、やはり深夜であった。機内からタラップに一歩出た途端、肌を切りつけるような寒風が吹きつけて来た。気温は氷点下十度とのことで、空港ビ

ルに入るまでの僅かな間に、頬と耳が痛くなった。空港にはカラチから先着していた運航担当者が出迎えてくれ、通関に戸惑うことはなかったものの、翌日からは支店開設委員の一人として仕事につき、ペルシア商法が、イランの気候のように苛烈であることを知って、パキスタン人ののんびりとした素朴な国民性を、懐しくさえ思った。

空港に向って運転しながら、目につくのは、ベンツ、シトロエン、キャデラックなどの欧米の大型高級車と、国旗、パーラビ国王の肖像写真だった。石油国有化運動により、一時、国外脱出を余儀なくされたパーラビ国王が、復活し、石油をはじめとするありとあらゆる利権を、ロイヤル・ファミリーで独占している。パーラビ体制維持のため、秘密警察が電柱の数ほどおり、反政府の動きを封じているとも云われていて、貧富の差はパキスタンの比ではない。

空港の駐車場で、恩地はしっかり、ドアのロックを確めてから、ビルの中に入った。欧米、中東の航空会社のオフィスが並んでいる二階の中ほどの扉に、NAL（国民航空）と記した紙が貼り出してある。ようやく、確保出来た空港事務所であった。

部屋には、段ボール箱がそこここに積み上げられ、空港事務所長と、運航、整備、運送（旅客、貨物）、客室の担当者四名が、近くの航空会社から借りて来た机や椅子に、固まるように坐っている。

「ここが、自前の事務所ですか」

恩地は、貼られたばかりらしい国民航空のカレンダーを見上げた。

「せめて十坪のスペースは欲しかったが、貰えたのはこの八坪弱の部屋だ、空港係官のもとへ日参し、〝ファルダー、ファルダー（明日になったら）〟と云われ続けて、永遠にファルダーかと気を揉んだが、ようやく鼻薬が効いたらしい」

ロイヤル・ファミリーに繋がる人物の口添えで確保出来たことを、空港事務所長は言外に匂わせた。

整備担当者が、近寄って来て、

「狭くても、オランダ航空のオフィスの片隅を借りて小さくなっていたことを思えば、ほっとしますよ、よそのオフィスでは、何かと気兼ねするし、おちおち仮眠も取れませんからねぇ」

と云った。国民航空がテヘランへ就航しても、日本とヨーロッパとの往復便は、週二便だから、整備は機材（DC8）が同じオランダ航空に委託することになっていた。ただ突発的な部品取り替えの連絡、機体の最終点検のために、整備士一名が常駐するのだった。恩地は、雑然とした部屋を見廻しながら、

「ここに入れる備品ですが、要り用のものは？」

総務担当者として聞いた。

「まず机と椅子、電話、金庫、書類棚――」

事務所長は、備品を挙げていき、

「それと恩地君、現地職員を二、三名、至急採用して貰いたい」

と付け加えた。

「そういえば、大事な人材のことをつい、うっかりしていました、早速、英字紙の『ケイハン・インターナショナル』に求人広告を出しましょう」

恩地は、用件を手帳に書き込んで、事務所を出ると、空港の官吏に挨拶して廻った。顔つなぎを密にしておかないと、突発的な依頼が通らないからだった。

ライター、煙草、時には女性用のナイロンストッキングを手渡し、喜ばれることがある。

帰り際、空港ロビーの椅子に独り、坐って、滑走路を見詰めた。離発着する機影はなく、かちかちに凍った砂漠のど真ん中の空港は、寒々しかった。
灼熱のカラチから、氷点下の冬のテヘランへ――、不条理な人事に、唇を噛み、空港から市内事務所として使っているパークホテル三階のスイートルームに戻って来た。
市内事務所勤務の開設委員は、中近東地区支配人兼テヘラン支店長以下、店次長、営業、市内運送に、総務担当の自分を含め五名だった。
恩地は、空港事務所に必要な備品のリストと、見積りを概算し、島津支店長の前へ行った。イラン政府との航空交渉で取り決められた条文を読み返していた島津は、恩地の見積書に、さっと目を通し、
「いいだろう、早く注文してやり給え」
と命じた。九州男児らしく口数の少い、古武士のような風格を備えた銀髪の島津は、開設委員の間で〝侍(さむらい)支店長〟と敬愛されている。
夕刻、空港事務所から一同が帰って来、今日一日の締め括りの連絡会議に入ったが、最後の言葉は、いつもと同じだった。
「支店長、こんな調子で遅々として進まないようでは、四月一日の就航など、到底、不可能ですよ」
空港事務所長が焦ると、
「間に合うはずがない、中東は日本人にとって一番、理解出来ない国柄なのに、本社の連中は、東南アジア並みの基準でしか考えんのだから、あくせくしなくていい、責任は私が持つ」
と引き取った。戦前、大東亜航空に入社し、ヨーロッパ路線開設の視察要員として、アジアか

ら陸路、中近東諸国を経由し、ロンドンへ行った経験と識見を有する人らしい言葉で、国民航空の支店長には珍しい反骨精神を持った、文字通りの侍であった。

「さて、晩飯にしましょうか、ホテルの食堂でまた羊の串焼きかと思うと、ぞっとする、といって、外は寒いから、中華料理店へ行くのも億劫だし」

「少し遅くなってもいいのでしたら、すき焼きをしますよ、あまり固くない牛肉が手に入ったのです、野菜も、ありますし」

客室担当者が、云った。

「え、すき焼き！　待つとも！　手伝うよ」

一同、唾を呑むように、雀躍(こおど)りした。

客室担当者は、手早く粒の細長い現地米を研(と)ぎ、日本から持参の電気炊飯器にセットすると、恩地たちもバスルームの洗面台に俎(まないた)を置き、風呂場の水道で洗った野菜類を刻んだ。

ご飯が炊き上ると、アルミ鍋に肉、ネギや白菜に似た野菜類、マッシュルームを入れ、今日だけは豪勢に使おうと、貴重品の醤油と砂糖で味つけした。食べることだけが楽しみの単身赴任者たちは、目を輝かせて、せっせと取り皿に醤油味の沁(し)みた肉や野菜を取り、舌鼓をうった。

煮詰った鍋が片付けられると、島津はウイスキーを生(き)のままで、少しずつ飲みながら、

「空港事務所が確保出来たから、次は市内の支店だが、シャー・レザー通りのあの角のビルが、良さそうじゃないか」

店次長に、云った。

「そうですね、あの近くには日本の商社をはじめ、邦人のお顧客(とくい)がまとまっていますから、立地条件はいいのですが、航空券を直接、売る総代理店が一向に、決まらないので、決めるに決めら

れないのです」
と嘆いた。イランでは、国民航空テヘラン支店が、直接、航空券を売れず、イラン人がトップの総代理店を置かねばならない取り決めになっていた。
「ところで恩地君、社宅の方をそろそろ検討しておき給え、誰も好きこのんで、こんな中東の地に来ているのではないから、家ぐらいは日本で住めないようなりっぱなのを探しなさい、初代の社宅が見すぼらしいと、次の代はやりにくくなるからね」
と指示した。
「それを伺って、安心しました、さしあたって支店長は、中近東地区支配人を兼務されてますから、ご希望を伺っておきますが」
「私は、息子たちが学齢期で単身赴任の身だ、年に一、二度、家内が訪ねて来る程度だから、一軒家よりフラットの方が気楽でいい、皆は、私に遠慮無用だ、本社から文句が出たら、それも責任を持つ」
と請け合った。

翌日、恩地のもとに、不動産屋から、いい物件がありますという電話がかかり、出向いて来た。
りっぱな口髭をたくわえ、彫りの深い顔だちであったが、いざ、物件の案内となると、自分の高級アメリカ車は、ホテルの駐車場に入れたままで、恩地の中古の日本車に乗り込んだ。
商談が煮詰まらないうちは、ガソリンを喰うのが惜しいのだ。加えて、メイン・ストリートをはずれて脇道へ入ると、舗装をしていない土漠の、雪と泥でぬかるんだ道になり、車体の低い高級車は腹がこすれ、傷がつきやすい。他人の車を使って商売しようという腹だった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com